

「和の花」が切り開く 生物多様性の民間参画

2008年の源氏物語千年紀をきっかけにKBS京都が呼びかけた「守ろう！藤袴プロジェクト」は、市民を巻き込んで7000株の原種を育てる成果を挙げ、2010年に終了した。その後も古都ならではのこの取り組みは京都市都市緑化協会の推進する「和の花」プロジェクトに継承され、本年からは京都で生まれた「KES環境マネジメントシステム」とも連携した、生物多様性の民間参画に展開しつつある。

秋の七草の一つとして親しまれてきたフジバカマは、乾燥させて香料ともなり、平安時代の女官は香袋に入れて十二単にし

のばせていたとか。かつての河原や原野に普通に見られたフジバカマは、今や「絶滅寸前」（京都府レッドデータブック）だ。

これに対して、園芸で広く用いられている系統は、少し小型でコバノフジバカマとか、ニセフジバカマ（村田源・元京都大学講師）とも呼ばれ、花は赤みが強い品種が多い。

藤袴プロジェクトでは、西京区天原野の溜池堤防で発見され、「乙訓の自然を守る会」の藤井肇氏が系統保存されていた野生の系統を繁殖させた。お香の松栄堂など民間参画で育てた株が開花する頃には、梅小路公園・朱雀の庭や下鴨神社、高台寺ほか、各地で展示され、古都京都の魅力向上に一役買った。



しかし、危機に瀕しているのはフジバカマだけではない。葵祭に不可欠なフタバアオイ、祇園祭の厄除け粽に用いるチマキザサが、近年顕著なシカ食害などで入手困難となったことを背景に、これらの苗を里親として育てる市民運動も展開されている。

一方、KESはISO14001と同じコンセプトながら低コストで、あらゆる事業者を対象に「環境改善活動への参画」を促す環境マネジメントシステムで、現在は4000を超える事業者が登録し、「紙・ゴミ・電気」の削減に取り組んできた。近年、この規格を改

定。生物多様性も環境改善目標に加えて、京都市都市緑化協会と

協働した「KESエコロジカル ネットワーク」として、危機に瀕する「和の花」の里親となる取り組みが始まったのである。対象種は例えば東山から鴨川に

注ぐ菊谷川（菊溪川）の河原に群生し

ていたというキクタニギク。江戸時代、本居宣長が本種を和歌に詠むなど名所として知られていたが、既に地元では絶滅し、西京区で見つかった系統が同協会によって保存されている。とりあえずは希少種の「生息域外保全」への企業参



キクタニギク

画であるが、今後は自社敷地の緑化や暗渠となつた小河川などの水辺を復活させる活動を通して、古都の文化的景観の再生につながってほしい。

編集後記

お気付きの読者もおられるだろうが、遠山益さんによる「白砂青松に行く」は3度目の連載である。初めての連載は2008年、2度目は10年で、合わせて国内12カ所の海岸林を紹介してきた。そこには東日本大震災で壊滅的な津波被害を受けた高田松原も含まれていた。震災後、マツを主体とする海岸林に対する世間の目は、ずいぶんと厳しくなった。ただ、未曾有の大津波による事態を見て、長い歴史の上に成立してきた海岸林を批判してよいのかどうか。日々の暮らしの中で、強風や飛砂を防ぐ役割を果たしてきたことを忘れてはならないはずだ。著名な林学者で、明治・昭和の三陸津波後に海岸林の調査へ出かけた本多静六は、遠山さんの曾祖父に当たる。海岸林の存在をもう一度評価し直し、被害を受けた場所にも適切に再生させたいという人一倍強い思いが、今回の連載につながっている。（米山）

表紙 「霧景」坂本正子

撮影地/和歌山県かつらぎ町の花間あじさい園



午前中雨が降り、どうかなーと思っていたところ、お昼近くになって雨がやみました。やがて霧が流れ出して、辺りが幽玄な雰囲気になりました。《いつまでも守り続けたい日本の自然》写真コンテスト(2014年)入選=朝日新聞社、全日本写真連盟、森林文化協会主催

グリーン・パワー GREEN POWER

6月号 定価 本体305円(税別)
発行日 2015年6月1日
発行者 須藤 久士
編集部 寺門 充 米山 正寛
発行所 公益財団法人 森林文化協会
〒104-8011
東京都中央区築地5-3-2
朝日新聞東京本社内
電話(03)5540-7686(ダイヤルイン)
郵便振替口座 00190-2-83593
印刷所 凸版印刷株式会社
©森林文化協会(本誌記事の無断転載を禁じます)
ホームページアドレス
http://www.shinrinbunka.com
(入会、購読の案内はホームページをご覧ください)

表紙デザイン: HOWELL
アートディレクション&デザイン: PROMAC
表紙用紙: 日本製紙(オーロラコート)
本文カラー: 日本製紙(コーライト)
本文モノクロ: 日本製紙(npi上質グリーン70(PEFC))